

62 助動詞のNICE特性

英語の助動詞は以下のように、3種類に分類される。

- (1) a. 法助動詞 : can/could, may/might, shall/should, will/would, 現在・過去同形の must, ought (to), 否定極性を持つ dare, need
- b. 支えの助動詞 : 時制を支える 'dummy' do
- c. 相・態の助動詞 : 完了相の have, 進行相の be, 受動態の be

法助動詞と助動詞 do は常に定形であるのに対し、助動詞 be と have には不定形もありうるという違いがある。

しかしながら、3分類したどの助動詞にも共通の特性があり、それを **NICE特性 (NICE Properties)** と呼ぶことがある。この名称は、Palmer (1965, 1974, 1987, 1990) が記述した助動詞の4つの特性、negation, inversion, 'code,' emphatic affirmation の頭文字を取って、Huddleston (1976) が Palmer (1974) の書評論文において、そう名付けたものである。

助動詞の第1の特性は、**否定 (negation)** に関する。助動詞は否定辞 not を従え、*amn't, *mayn't を除き「縮約されて否定形を持つ」とさえ言える。

- (2) a. I can't/cannot swim, so I won't/will not.
- b. I don't/do not want to swim. c. I haven't/have not swum at all.
- (3c) が示すように、本動詞に否定辞 not を従えることはできない。
- (3) a. He began to cry. b. He didn't begin to cry. c. *He begann't cry.
- (4) では、本動詞に後続する否定辞 not は to 不定詞を前置修飾しており、文法性は (3) と同様のパターンを示すのである。
- (4) a. I prefer not to ask him. b. I don't prefer not to ask him.
- c. *I prefern't to ask him.

第2の特性は、典型的には疑問文において、助動詞は主語の前に出て **倒置 (inversion)** され、「助動詞 + 主語 + 本動詞」の語順になることである。

- (5) a. Should we ask them? b. Did you want to ask them?
- c. We hadn't asked them yet.

現代英語では、本動詞が主語前の文頭に出ることはできない。

- (6) a. *Said you that? b. *Wanted you to ask them?

第3の特性は、動詞句の繰り返しを避けるために、助動詞だけで独立して直前の動詞句の意味内容を表わす用法である。Firth (1968: 104) に従えば、これを **コード (code)** と呼ぶ。疑問文への返答によく用いられる。

(7) a. May I go there? —Yes, you may.
 b. Did you see that ghost? —No, I didn't.
 c. Have you ever been to Hawaii? —Sure, I have.

倒置にも用いられ、(8a, c) のように等位接続詞に導かれる場合もある。

(8) a. We must go and so must you.
 b. (On the phone/LINE) I miss you. —So do I, darling.
 c. I'm not accustomed to this situation, nor is anybody else.

直前の動詞句が存在しなくとも、意味内容が不明でも文として成立するという点で、‘truly in code’であると Palmer (1987: 20) はこの名称を擁護する。

(9) a. Do you think he will? —He might. I suppose he ought to.
 b. Well, his brothers have. They perhaps think he needn't.

最後に、第4の特性は強勢に関する。助動詞も本動詞も、それぞれ (10) や (11) のように強勢を受けることがある。

(10) a. I cán play the piano. b. I dídn't say such a thing.
 c. What a fool! You áre being deceived.

(11) Not only did I sée the Queen, I tálked to her!

本動詞の強勢は (11) のように動詞の意味内容を強調するが、助動詞に特徴的な**強調 (emphasis)** は、疑いを抱かれているような場合にそれを払拭するように強く肯定するための強勢であり、(12b, c) は命題の真性を強調する。

(12) a. You móst see him. (Even if you don't want to.)
 b. I díd see the ghost! (But everybody doubts it.)
 c. The concert wás cancelled. (You still think it will be held.)

(12b) のように do が肯定文で用いられる例では、do は必ず強勢を受ける。

以上が Palmer (1987: 14-21) の概略である。しかし日本人学習者に教える際、「コード」は適切な訳語がなく概念も難しいので、筆者は代わりに**縮約 (contraction)** を第3の特性として教えている。助動詞は notのみならず、I'll < I will, you'd < you had/would, she's < she is/has 等、代名詞主語と短縮形を作れるものが多いからである。ではコードの例文をどう扱うかであるが、(8) は第2の特性である倒置に含められる。(7) と (9) は第4の特性に**省略 (ellipsis)** も設け、そこで2種類のEについて説明すれば頭文字NICEを保つことができる。実はEが2つあると「NIECE特性」という頭文字語ができるのであるが、これを普及させようとは思っていない。

(村上 まどか)